

「十二弟子を派遣する」

2022年01月17日

イエスは、十二人を呼び寄せ、二人ずつ遣わすことにされた。(マルコ福音書6章7節)
十二人は出て行って、悔い改めを宣べ伝えた。また、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした。(マルコ福音書6章12節)

主イエスは、「これと思う人々を呼び寄せ(マルコ3:13)」、十二人を弟子とされた。「これと思う」の判断の基準は分からないが、呼び寄せられた者たちは、社会的に有能な人ではなく、皆ガリラヤの無学な普通の人(使徒言行録4:13)たちであった。

主イエスは二人ずつを、「神の国」の宣教に遣わされた。二人一組にしたのは、申命記19章15節に、「どのような過ちや罪であれ、人が犯した罪は一人の証人によって確定されることはない。人が犯したどのような罪も、二人または三人の証人によって確定されなければならない」と規定しているように、宣教の前進を互に承認し合うためであった。また、二人一組の方が、互いに支え合い、安心であろう。

この時、主イエスは弟子たちに3つのことを守るように命じられた。①「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物を履くように、そして『下着は二枚着てはならない』と。」持っていいものは杖、下着は着たまま、履物は履いてよい。後は、パンも袋も金も持たずはならない。要するに、普段着、そして、手ぶらで行けと命じておられる。宣教は、弟子たちがこうしよう、ああしようと思ひ悩まなくても、神が先立ち、導かれるということである。マタイ福音書10章には、弟子たちを宣教に遣わすに際し、主イエスは、二つのことを語っている。一つは、「あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢でありなさい(マタイ10:16b)」で、宣教において、賢い知恵深さと汚れない純真さが求められることは真実である。もう一つは、色々な人の前で証ししなければならないが、「何をどう言おうかと心配してはならない。言うべきことは、その時に示される。というのは、語るのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる父の霊だからである(マタイ10:19~20)。」この言葉は、初代教会で体験した事柄であろう。マルコ福音書が告げる、「普段着、素手でよし」という言葉は、宣教に必要なものは、神が備えてくださると励ましで、心強い言葉である。私は恥ずかしながら、知恵のないこととお金のないことに嘆くことばかりであった。②「どこでも、ある家に入ったら、その土地から出て行くまでは、そこにとどまりなさい。」村に入り宣教するために、家を借りる訳であるが、宣教を終えて村を出るまで、借りた家を変えてはならないということであろう。教会に赴任したら、腰を据えて、その地の伝道に励みなさいということである。③「あなたがたを受け入れず、あなたがたに耳を傾けようとしない所があれば、そこを出て行くとき、彼らへの抗議のしるしに足の塵を払い落とさなさい。」「足の塵を払い落とす」行為は関りを払拭する強い行動である。宣教が受け入れられず、拒否された時は、その所のものなら、小さい塵、芥でさえ、身につけてはならないということである。十二人の弟子たちは、神を信じるように悔い改めを迫り、悪霊を追い出し、病人を癒やす「神の国」の宣教に励んだ。彼らの宣教は、神の恵みと祝福をいただいている喜びを共有することであった。聖霊降臨で最初のエルサレム教会が誕生してから、同信の友を集め、教会を形成する宣教に変わっていった。人を集め、拡大を目指す宣教は屈折することがあるが、数量を問わない弟子たちの宣教は開放されたものであったに違いない。